

総評論序説：1950年代労働者文化論への視 角をてがかりに

篠田, 徹 / Shinoda, Toru

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

707・708

(開始ページ / Start Page)

44

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2017-10-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014301>

総評論序説

——1950年代労働者文化論への視角をてがかりに

篠田 徹

- 1 総評の論じ方
- 2 歴史的ブロックとしての総評と戦後日本文化の労働化仮説
- 3 文化戦線としての1950年代の労働者文化運動
- 4 文化機構としての総評
- 5 総評が関与した労働者文化運動と現代に続くその系譜

1 総評の論じ方

『素晴らしき哉、人生！(It's a Wonderful Life!)』は、1946年にアメリカで最も有名な監督の一人、フランク・キャブラ(Frank Capra)が、やはり彼の作品の『スミス氏都へ行く(Mr. Smith Goes To Washington)』などで日本でもおなじみのジェームズ・ステュアートを主演にして撮った名作の一つだ。日本でも1954年に公開され、これをリアルタイムで見た方々も読者のなかにはいらっしやるだろう。ちなみにフランク・キャブラは、1930年代から作品も撮影現場も次第に社会民主主義の影響がみられるハリウッドで最も大衆の支持を得た作品を作り続けたが、この作品は反資本主義的であると、しのびよるレッドパージの前触れのなかでアカデミー賞を逃した⁽¹⁾。

それはともかく、映画の舞台は第二次大戦が終わった1945年のクリスマス・イブのアップ・ステート・ニューヨークと思わしき雪降る町はずれの鉄橋。そこから眼下の川に飛び込もうとする男がいる。この男を気づかう家族の祈りを聞いた神は、訳あって翼をもがれた二級天使を彼のもとにやり、神の意思にそむく行いをなんとか思いとどませようとする。そこで神はまず、天使を下界に送る前に、男の人生の回想を見せることにする。

アメリカで最も感動的な映画として名高く、いまもクリスマス・イブの夜にはゴールデンアワーに全国ネットで放映されるこの映画は、もちろんハッピーエンドで終わるのだが、興味深いのは、男がふたたび生きる希望を見出したきっかけだ。天使はその男がいない町やそこに生きる人びとの、変わり果てた姿を見せて、自分など生きる価値のない者だと絶望する男に、彼のおかげでいま

(1) Lary May, "Movie Star Politics: The Screen Actors' Guild, Cultural Conversion, and the Hollywood Red Scare," in Lary May ed. *Recasting America: Culture and Politics in the Age of Cold War*, Chicago and London: The University of Chicago Press, pp.128-142, 145-146.

のすてきな町があり人びとの幸せな生活があることを教えたのだ。

この二級天使の一計は、総評（日本労働組合総評議会）とその労働運動⁽²⁾を考える上でも大いに参考になる。この間、この論文を書くためにたくさんの日本史全集の戦後編を読み漁った。この大体四半世紀の間にいろいろと工夫をこらして編纂された全集がいかに多かったか、それ自体驚きだったが、それ以上にびっくりしたのは、そうした各本さまざまな視点を生かして書かれた戦後史で、総評やその労働運動、特に最もはなやかであった1950年代のそれとその後に対する評価は、不思議と判で押したように同じであった。

それは1950年代の日本にはそのあと実際にたどることになるのとは異なる別の選択肢があり、それを代表するのが総評とそれに率いられた労働運動であった。それが1960年代以降、高度成長と日米協調によって、そのあったかもしれない道は閉ざされ、総評とその労働運動は歴史の舞台から姿を消す⁽³⁾。

このいわば総評敗北論、例外論あるいは断絶論は、本特集の総論（特集にあたって）で述べた日本の1950年代、特に労働者文化論においても顕著で、戦後日本の労働者が示した団結の文化は、高度成長と日米同盟のもとで資本主義化し個人主義化する日本人の生活文化の変化にかき消され、時に再発見されるが、基本的には忘れられていくというものだ⁽⁴⁾。

だがわたしたちが生きる世界で、いったん華々しかった存在が、そのあと跡かたもなく消えてしまうことなどあるのだろうか。そういった先から、「いやいや消えてはいません。少数派としていまでもその薫陶を受けついで組織や運動は生き残っています」という叫びやささやきが聞かれる。けれども歴史の表舞台やいまを生きるわたしたちの多くが忘れていているという点では、これらの声もやはり断絶論の域を出ていない。

キャプラとは対照的に、初期の『俺たちに明日はない (Bonnie and Clyde)』以来アメリカ映画界で常にタブーに挑戦してきたウォーレン・ベイティ (Warren Beatty) の作品に、戦前の名作のリメイクで『天国から来たチャンピオン (Heaven Can Wait)』がある。

これまた天国が絡む話だが、新人天国案内人の手違いであと数十年生きられるはずのプロのアメリカンフットボールチームのクォーターバックが天国への経由地で、その間違いに気づいたベテラン案内人と下界へ戻ると、その体はすでに灰となり、やむなくまもなく亡くなる人の体に移ろうと右往左往する。たまたま大富豪の体に移ったときに会った女性と互いに一目ぼれ、元いたチームを買い取り体を鍛えてスーパーボールへ。勝利の歓喜に喜ぶ主人公に案内人は、これからこの新しい人になって過去はすべて忘れろと告げられる。この仕組みを前もって聞かされていた主人公は将来を約束した彼女に、たとえ姿かたちは違っても僕たちは目でわかると告げる。愛する人が突然姿を消し、その言葉だけを頼りにしていた彼女に、過去を忘れた主人公がスタジアムからの帰りに偶然出会う。互いに見つめ合う彼に彼女が「あなたはもしかしてクォーターバック？」と聞

(2) 本稿では、総評という表現で、ナショナルセンターとしての総評だけでなく、その構成組織、中央、地方の関連組織のすべての活動を含む。

(3) 一つの典型として職場や企業の状況に注視した Andrew Gordon, *The Wages of Affluence: Labor and Management in Postwar Japan*, Cambridge and London: Harvard University Press, 1998 がある。

(4) この分野の画期的な作品である『戦後民衆精神史：総特集』（『現代思想』臨時増刊、第35巻第17号、2007年12月）も、同様の認識のように見える。

き、うなずく彼に愛する人が乗り移っていると確信する。

連合ができて四半世紀、これに総評が乗り移っていると思ったことが一度や二度ではない筆者は⁽⁵⁾、この間、戦後映画を最近一気に何十本も見続けたとき、そのストーリーや役者たちを見ながら、総評労働運動とともに一時代を画した1950年代の労働者文化は、その後の日本の大衆文化に息づいていると確信する⁽⁶⁾。

この思いや感覚をどうやったら人に伝えられるか。この文章はそのための道具立て、すなわち総評継続論および1950年代労働者文化の連続論を説明する理論的枠組みや関連する事例を検討し、今後書き改められるべき戦後日本をつくった総評労働運動とそれが形成に深く関与した1950年代の労働者文化とその後の時代への影響を論ずるための準備にしたい。

2 歴史的ブロックとしての総評と戦後日本文化の労働化仮説

まず総評労働運動とともに一時代を画した1950年代の労働者文化が、その後の日本の大衆文化のなかに溶け込んでいるということを考える手立ての話からはじめよう。それには本号前掲の総論(特集にあたって)でも述べたように、労働者文化運動をある社会の文化のありよう全体の中で考える必要がある。これは当然労働者文化運動が文化全体のありようによつて与えた影響と労働者文化がその前の時代の文化のありよう全体からどのような影響を受けているかの両面から考えねばならない。またそれら影響のし合いがどのような背景や環境によるものなのか、さらにそれらは、資本主義の発展とそこにおける労働や労働者のありようといかなる関係にあるのかにも留意しなければならない。ただここでは1950年代の労働者文化の戦後日本の文化のありよう全体に対する関係を考えるので、前者すなわち労働者文化運動が文化全体のありようによつて与えた影響とその背景としての日本資本主義の発展という側面が強くなる。

こうした視点に立てば、やはりこれも総論(特集にあたって)で紹介したアメリカの労働者文化運動を論じたMichael Denning, *The Cultural Front: The Laboring of American Culture in the Twentieth Century* (London and New York: Verso, 1996)の議論が欠かせない。

おさらいをしておくと、デニングは、1930年代のアメリカのニューディール期のCIO(産別会議)を基盤とした左翼リベラルの運動を、「人民戦線社会運動(Popular Front Social Movement)」と命名し、それが当時のアメリカにおける大衆文化の発展を背景にして、アメリカ文化の「労働化(Laboring)」をもたらしたと主張。本書はその主張を証明するため、労働組合や共産党の周辺部や隣接ないし接続領域で展開された文化芸術分野における運動を網羅的に分析した。

このデニングの分析の背景には、グラムシの歴史的ブロック論がある。この歴史的ブロックには社会勢力連合と特定の社会形成の二つの意味があり、この二つが結合したときにヘゲモニーが生まれる。すなわち社会勢力連合としての歴史的ブロックが、ある代表形態を用いて合意を調達することで、社会形成という意味での歴史的ブロックをも確立しながら、一定期間社会を主導するとき、

(5) 篠田徹「再び“ニワトリからアヒルへ”?——五五年体制の崩壊と連合」日本政治学会編『年報政治学 55年体制の崩壊』岩波書店、1996年。

(6) 働く文化ネット『日本の労働映画百選』働く文化ネット、2016年。

ヘゲモニーが生じる。そしてこの時代は、後にしばしばその社会勢力連合の名称で呼称される。1930年代のアメリカの場合、それが人民戦線社会運動であった。

この歴史的ブロック論に立てば、CIOは労働組合の連合体であると同時に、1970年代まで引き伸ばして考えた場合、アメリカのリベラルな社会形成のヘゲモニーの形成に寄与したニューディール連合という社会勢力連合の重要な構成要素であった。つまり人民戦線社会運動という社会勢力連合はその後確立するニューディール連合の前身と考えることもでき、CIOは双方における重要な構成組織であった。

CIOは確かに第二次大戦中を除けば、支持政党の民主党を通じて部分的かつ間接的に政権に影響をもっただけである。もっともCIOは、北米の都市部や工業地帯の多人種、多民族が構成する労働者階級とそのコミュニティにおいて、大きな政治的、社会的、文化的権威をもった。実際当時労働者、とりわけそれまで不遇であった東南欧移民二世が組合に加入するのは、経済的利益を期待する以上に、その構成員になることで実質的な市民権が得られることを期待したからであった。

このCIOならびにそれが一角を構成した民主党とそれが主導した政府を含む関連組織がヘゲモニーを握った20世紀半ばのアメリカのリベラル・ヘゲモニーの分析に適用したデニングの理論的枠組みを、日本の戦後民主主義にも用いることができなだろうか。特に、当時の総評・社会党ブロックは、デニングの分析におけるCIOとそれが主導した人民戦線社会運動と同じ社会勢力連合とみなすことができなだろうか。

この点で、1950年代、総評が当時CIOと同じように労働組合の連合体以上の存在であったかどうかを検討するために、高野路線といわれた総評の平和運動や国民運動への深い関与と、それに対する国民各層のポジティブな応答の再吟味は重要である⁽⁷⁾。その検証方法自体大きな検討課題だが、当時の運動状況から推察して、それが労働者文化として一定程度見出される可能性は否定できない。そしてこの場合の労働者文化とは、社会的主導勢力のそれであり、当時の総評加盟組織の組合員の世界観や思考様式、生活形態や行動様式全体、つまり、ありていにいえば生き方暮らし方ということになる。

また同時に本特集がとりあげ、また総論で前述した近年の1950年代研究が関心をもったように、総評は、CIO同様、都市部のみならず全国の労働者階級の間で、総評自身や加盟組織、さらにそこに連なる人びとの自主的なそれを含む旺盛な文化活動を通じて、政治的、社会的のみならず文化的影響力を有した。それは通常いわれる1950年代の労働者文化運動の有力な一角を占めていた。

この二つの労働者文化（ここでは便宜上前者を広義、後者を狭義とする）の相互連関を理解することは、先述した労働者文化運動をその時代ならびにそれに続くその文化全体への影響を考える上で重要である。

この点で、デニングがその著書で提起したアメリカ文化の労働化という論点も同様に考慮に値する。デニングはCIOが中核的役割を担った人民戦線社会運動がもたらした「文化戦線（Cultural Front）」が、その後のアメリカ文化にもたらした「労働化」を次のように説明する（16, 17頁）。これは総論（特集にあたって）でも述べたが再度簡単に列挙しよう。

(7) 高野路線の総評については、篠田徹「“企業別組合を中心とした民衆組合”とは（上）（下）」『大原社会問題研究所雑誌』564号、565号、2005年11月号、12月号を参照。

第一にアメリカ文化の労働化は、この時代のさまざまなレトリックや言説のなかに、「労働」やその類似、類義語が多用されている状況、すなわち言語の「労働化」をさす。

第二にアメリカ文化の労働化は、アメリカ文化のプロレタリア化という文化の産業的、技術的側面における変化の状況をさす。すなわちまず文化や芸術の世界に労働者階級の参画とその影響力が増してくる。またエンターテインメントやレジャー産業に、労働者階級の子弟の高卒、大卒従事者が増大してくる。さらにこれらエンターテインメント産業やレジャー産業の商品やサービスを消費する労働者も増えていく。

第三にアメリカ文化の労働化は、文化を構成する財やサービスとその提供を担う人びとのなかで労働の要素を可視化する。すなわちそれはまず文化が産業化されるにつれ、芸術家や演奏家、作家が次第に文化労働者になっていく。その結果、文化戦線の中心勢力として、脚本家、漫画家、ジャーナリスト、教師などを含めたこれら文化労働者の組合が結成される。

第四にアメリカ文化の労働化がめざしたのは文化の社会民主主義化であった。

第五にアメリカ文化の労働化は試行錯誤のなかで行われる労働過程であった。

このデニングのアメリカ文化の労働化仮説を、1950年代の日本の労働者文化運動の分析にあてはめる場合、それは戦後日本文化の労働化ということになる。そして上記のアメリカの場合の五点の特徴は、詳細な分析は別の機会に譲るとして、基本的に戦後日本の場合にも該当するものと思われる。

例えば言語の労働化は、戦後の日本で特に1950年代には、労働省や労働組合、労働法や労使関係、労働運動や労働争議など戦前なかった、あるいは言及がはばかれた労働用語、言語が登場し、新聞等はもちろん公用、業務言語に頻出し、日常会話でも使用されたことが容易に想像できる。また娯楽産業の労働化についてもその需要と供給双方での労働者階級の参画が増大したことは同様だ。

さらに文化労働者の可視化と組織化についても、例えば戦後労働運動における映画産業の重要性を指摘できるが、1950年代についてはやはり日教組の、組合としてはもちろん教育文化運動の主体としての存在も大きく、この視点からの再検討はどうしても必要である。なおこの点については、その運動過程を検討する上で、戦後日本文化の労働化に関する労働過程論的分析とも関わってこよう。

文化の社会民主主義化については、定義の問題もあり、ここで不用意な判断は避けたいが、社会民主主義的な文化運動や思考、行動、生活様式の検討自体、いわゆる「戦後民主主義」の再解釈や労働運動や政治運動の社会文化的影響を考える上で、きわめて重要な研究課題だと思われる。

いずれにせよ、総評を日本のCIOになぞらえ、グラムシの歴史的ブロック論に基づいたデニングの議論を応用して、総評、あるいは総評・社会党ブロックをナショナルセンターとその構成、関連組織の連合体およびその活動以上に、1970年代まで続くアメリカのリベラル社会に匹敵する戦後民主主義社会の形成とそこでヘゲモニーを発揮したニューディール連合に匹敵する革新勢力という社会勢力連合の重要な構成構成として再検討することはぜひ試みられるべきだろう。また同時に、デニングがその著書で提起したアメリカ文化の労働化という論点も同様に、戦後日本文化の労働化仮説として考慮に値する。

3 文化戦線としての1950年代の労働者文化運動

デニングが用いた文化戦線という呼称とそれに見立てた組織群だが、当時1950年代前半に総評も深く関与した当時の労働者文化運動に対して、日本でも左翼の重要な文化戦略という見方がされていた事実がある。ただし反対側の立場からだが。

1956年3月に国民文化調査会というところが編集し、東京の星光社から発行された『左翼文化戦線——その組織と活動 概観・うたごえ・映画・演劇・文学・出版・放送・科学・平和運動・文化交流』という本がある。B5版で330余頁のもので、以下が目次である。

はしがき

第一章 日本共産党文化運動発展の概観

- 一 日本共産党の文化政策
- 二 芸術宣伝学校設立から文化サークル協議会結成まで
- 三 文化オルグ大量養成機関の設置
- 四 党員芸術会議
- 五 日共文化テーゼ
- 六 日共六全協以後の文化運動方針

第二章 全国的にのびた「うたごえ運動」

- 一 中央合唱団
- 二 うたごえ運動の発展
- 三 日本のうたごえ運動の指針
- 四 全国合唱団会議
- 五 昭和三十年の「うたごえ」概況
- 六 「一九五五年日本のうたごえ」概況
- 七 合唱団「白樺」創立五周年記念

第三章 国民映画運動と移動映写網

- 一 党の映画政策
- 二 映画関係党員の任務
- 三 国民映画運動の発展について
- 四 一九五五年の「国民映画運動方針」について
- 五 日共「移動映写運動」指針
- 六 独立プロダクション協同組合
- 七 独立映画株式会社
- 八 映画観客団体全国会議

第四章 文化オルグの演劇界進出

- 一 前進座
- 二 新劇研究所
- 三 舞台芸術学院
- 四 中央芸術学校（劇団中芸）
- 五 新協劇団
- 六 劇団「青俳」
- 七 泉座
- 八 劇団七曜会
- 九 劇団「稲の会」
- 一〇 劇団建設座
- 一一 人形劇団ブーク
- 一二 その他

第五章 国際派台頭の左翼文学

- 一 左翼文学最近の傾向
- 二 新日本文学会
- 三 「日本文学学校」の活動
- 四 「生活と文学」創刊
- 五 「生活記録」運動

第六章 ブームの波に乗る左翼出版活動

- 一 日共中央指導部の出版活動
- 二 日共の労働組合機関紙誌工作
- 三 日共外郭出版団体による出版
- 四 日共の中間インテリ層宣伝活動と左翼出版ブーム
- 五 共産圏諸国の対日宣伝出版

第七章 間断なき対日放送の実態

- 一 共産圏諸国の放送の概況

二 自由日本放送	四 日本アジア連帯委員会
三 自由日本放送と日共の関係	五 国民文化会議
四 自由日本放送と共産国放送との関連	六 基地問題文化懇談会
五 対日放送にみる最近の傾向	第十章 共産圏の文化交流
第八章 マルクス・レーニン主義の浸透する	一 ソ連の文化交流態勢
科学運動	二 中共の文化交流態勢
一 民主主義科学者協会（略称「民科」）	三 オイストラとオーバーリン
二 日本ミチューリン会	四 学術視察団と郭沫若
三 日本学術会議	五 映画流入の傾斜
第九章 拡大する平和統一戦線	六 猿之助と演劇交流
一 平和擁護日本委員会	七 文学交流の雪解け
二 原水爆禁止日本協議会	八 北鮮その他
三 憲法擁護国民連合	あとがき

この本の「はしがき」の最後にはこうある。「本書が内外左翼文化戦線の実態を啓蒙し、挑戦してくる共産主義文化の咀嚼と克服に貢献し、以てわが国の主体的文化確立に資することができれば、望外の幸せである」。この文章からも推察できるように、この本は1950年代半ばの反共主義的運動の資料として分析することができる。

またその前には次の一文がある。「元来、左翼文化運動は、共産党の活動のなかでも、おおむね一貫性を保ち、かつ着実な成果をあげている最大のものであって、つとに昭和二十一年二月、党が政治、組織の行動綱領において「社会主義革命」を明らかにしたときにおいてすら、文化政策においてはすでに「民主主義文化革命」をうたっており、「新綱領」前後も一貫して統一戦線を培養し、インテリ、青年、婦人層などの大衆獲得に大きな役割を果たしてきたのである」。ここから本書を、当時の日本共産党の統一戦線政策、文化政策に関する反共主義的運動の認識を検討する資料として読むこともできる。

そしてもちろん当時の共産党の文化運動の実態を考察する参考資料として読むこともできる。

ただ労働者文化運動と文化全体の関係という文脈で考えるならば、それがどこまで実態を反映しているかは別だが、人びとの認識や想像というレベルにおいて、当時の総評⁽⁸⁾あるいはその外延（組合との関係の有無にかかわらず）の労働者文化運動の範囲と影響、あるいは戦後日本文化の労働化とそこでの労働運動や関連する政治運動のヘゲモニーを押し量る（正確かどうかは別として）一つの気候図や海図のようなものとして利用することも可能であろう。

ところで『左翼文化戦線』の第九章「平和統一戦線」に、国民文化会議が入っている。これが一般に総評の労働者文化活動の全国的調整組織とみなされてきた。国民文化会議については、これまでまとまった研究がなかったが、大原社会問題研究所で近年資料の整備が進んでいるので、その成

(8) 当時は社会党と共産党、あるいは無党派勢力が混在、共生する運動の接触空間、接続領域であった。なおさまざまな背景をもつ異文化間の「接触空間」という概念と事例については、緒形康編『一九三〇年代と接触空間——ディアスポラの思想と文学』（双文社、2008年）を参照。

果もまもなく世に出るであろう。いずれにせよこの組織が日本の労働運動にとって空前絶後の組織であることは確かだが、労働者文化運動の組織として考えた場合、欧米には類似組織も少なくない。

この点例えば労働者の学習組織を労働運動の初期に立ち上げ、今日では産業構造転換に伴う労働者の職業訓練の一端も担うスウェーデンの文化組織との比較は重要であろう⁽⁹⁾。またもちろん前述のCIOは「歌う労働運動」と呼ばれるくらい文化運動を活用したところであり、ここの比較も欠かせない⁽¹⁰⁾。もっとも総論（特集にあたって）でも述べたように、その伝統は20世紀初頭のIWWのそれにさかのぼらなくてはならないが⁽¹¹⁾。

それらの比較研究は別稿に譲るとして、ここで問題にしたいのは、先の第九章で国民文化会議が他の平和統一戦線組織と一緒にされていることである。これは『総評四〇年史』編纂委員会編『総評四〇年史』第二卷（第一書林、1993年）の課題史③「国民運動とカンパニア組織」で、やはりカンパニア組織として平和運動を含む他の政治運動組織と一緒に論じられているところから見て、労働界、あるいは左翼運動の世界ではあながち異例なくくりではないようにみえる。

カンパニア組織とは、英語でいうキャンペーン組織であり、それが事実上選挙運動組織をさすように、基本的には政治目的に使われるのが一般的だ。そういった先から、国民文化会議は本来自発的で創造的であるはずの労働者文化運動を特定の政治目標のために利用するものだという批判も出てくるかもしれない。

けれどもこうしたカンパニア組織を多用した高野実事務局長が、「カンパニアは固定すべからず」といったとされるように、もともとこれらの組織は、特定の政治目標の達成が目的だったとするよりも、こうした多様なキャンペーンを通じて組合員や国民が、平和や基地や憲法の問題、アジアや核を常に意識し続けることをめざした国民文化運動と考えるほうが腑に落ちる。というのもこれらの問題はいずれもそう簡単には決着がつかないことは、運動指導者たちがよくわかっていたはずだから。

だとするとこれらのカンパニア組織の目的は、一見政治的に見えながら実は組合員や国民の社会観や世界観、あるいはものの見方や生活の仕方、すなわち先に述べた人びとの生き方暮らし方、すなわちアメリカの民主主義の原点を論じたトックヴィルが指摘したのと同じ「心の習慣」⁽¹²⁾をつくる広義の労働者文化運動ではなかったか。つまりここでは国民文化会議が本流であり、その他は政治運動の文化的利用だということになるのかもしれない。

高野実という人は、戦前の人民戦線運動に際しては、師匠の猪俣都南男とともに『労働雑誌』という当時庶民に大人気であった『キング』の労働者版を作ろうとし、また総評の労働者文化運動への積極関与を自ら提起するなど、労働運動における文化の問題にことのほか敏感であった。また彼は労働者のモラルや指導者の倫理性にも非常にこだわった。それは戦後の大衆が政治運動や社会運

(9) 岡澤憲美『スウェーデンの政治——実験国家の合意形成型政治』（東京大学出版会、2009年）64頁の労働教育同盟に関する記述を参照。

(10) 篠田徹「裏声で歌え“共和国讃歌”——トランス・パシフィック・サンディカリストという運動系譜」梅森直之・平川幸子・三牧聖子編著『歴史の中のアジア地域統合』勁草書房、2012年、228頁。

(11) 篠田徹「労働文化耕論」『月刊連合』第313号、2014年5月、22、23頁。

(12) トックヴィル（井伊玄太郎訳）『アメリカの民主政治』講談社、1987年。

動に求めるところでもあった。さらに清水慎三など高野に連なる労働運動の指導者も、「エートス」など活動家の人間類型に体现された総評労働運動の精神性を強調し、組合員を越えた労働者全体に対するその責任と使命を訴えた。こうした日本の労働運動のきわだった文化性を考えるとき、また日本の労働運動の権力奪取に対する淡白な性格をふりかえったとき、政治運動の文化的利用という日本の労働運動の特性が見えてくる⁽¹³⁾。

そう考えたとき、総評とは何だったのかという疑問が頭をもたげる。

4 文化機構としての総評

総評とは何だったのか。これを考える上で、デニングは前掲書でもう一つ有用な理論的枠組みを提供している。それが文化機構 (cultural apparatus) だ (38～50 頁)。これはもともと社会学者のライト・ミルズの議論だ (Irvin Louis Horowitz ed. *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, New York: Oxford University Press, 1963, pp.405-423)。ミルズによれば、現代人の経験は、ほとんどが誰かや何かが解釈したものを通して行われる。その解釈を形成するのが文化機構で、それは各種の教育、文化機関やメディア・ネットワークや行政機構、企業や団体組織といった諸制度から構成され、政治経済や社会文化のあらゆる分野の情報を創造し伝達している。デニングはこの考え方を CIO の時代にあてはめて、それら諸制度の特徴や情報の傾向、さらにそれらの情報を利用する労働者の性格や利用特性について論じており、なかでも当時の文化産業や失業対策機構でありながら、実際には多くの文化事業を行い、また雇用創出を通じて労働者の未来志向の生活態度を再生したとされる WPA (雇用促進局) について述べると同時に、こうした文化機構が行う精神労働 (mental labor) の重要性を指摘している。

ではこうした当時の文化機構での精神労働の担い手は誰だったのか。これを考える上で、1930年代と40年代におけるアメリカの政治レジームを分析した David Plotke, *Building A Democratic Order: Reshaping American Liberalism in the 1930s and 1940s*, New York: Cambridge University Press, 1996 の議論が参考になる。彼によると、この時代の政治レジームを形成した民主党ブロックにおいて、文化機構の精神労働的な機能を果たしたのは、プロトケが進歩的リベラルと呼ぶ政府機構を含めた民主党ブロックの諸組織の中間的活動者層であるという。彼らは部分的にリベラルかつ社会民主主義的な思考を有する一方、本業や日常業務などの仕事を含めた社会生活全体を連帯主義的な社会形成の場と機会であるとみなし積極的に働きかけた。つまり彼ら彼女らは仕事や社交を通じて活動する民主党ブロックのボランティアなオルガナイザー (オルグ) であったという (92～127 頁)。そしてこれら諸組織には民主党黨員あるいはその支持者、またそれらの人びとと関連のあった行政、企業、団体等とその構成員が含まれ、そのなかには重要な構成部分として大学やマスコミ、メディアも入ってくると考えられる。

実はこれとよく似た議論を、日本の高島通敏が総評・社会党ブロックについて行っている (『大衆運動の多様化と変質』日本政治学会編『五五年体制の形成と崩壊——続・現代日本の政治過程』

(13) 清水慎三「総評遺産とは——その歴史性と一般性」『月刊総評』最終号 (1989年8・9月号)、篠田徹「心をつくる労働運動——次世代日本を見晴かし」『連合総研レポート DIO』280号 (2013年3月号)。

岩波書店、1979年）。高島はここで1950年代から70年代まで、労働運動を中心に農民運動、学生運動、女性運動、消費者運動、市民運動、平和運動、文化運動など広範で多様な大衆的政治、社会運動連合として総評・社会党ブロックが率いた革新国民運動のメカニズムを分析しながら、そのなかで運動の裾野部分に注目する。それは、「映画・演劇・舞踏・美術・文学・学術など各分野にわたる広汎な文化団体の活動」とそれらと何らかの関係をもちながら、同好の志が自主的に集まって「職場や組合組織を網の目のように埋めていた活発なサークル活動」（327頁）というまさに国民文化会議を一つの象徴的組織にした戦後の労働者文化運動全体のことであった。

つまりこれまでの議論をふりかえるならば、総評とその周辺を含めた労働者文化運動（特にさかんであった1950年代のそれは戦後日本の文化機構の一翼を担い、その他の諸制度とともにいわゆる戦後民主主義を受容して生きる人びとのトックヴィルがいう心の習慣とウィリアムズがいうその感覚構造を培ってきたといえる⁽¹⁴⁾）。この点はさらに詳細な分析が必要ないことはいうまでもないが、ここでは仮説的な意味でこうした総評理解を示しておきたい。

そしてもしそうだとするならば、総評労働運動がなかったならば、この文化機構はまた違ったものになり、それは戦後民主主義の日常とそこに生きる人びとの意識をも少なからず変えたことであろう。だとするならば、総評、特に1950年代のそれは特異ではあったかもしれないが、それがその後の日本人の思考や行動様式、世界観、あるいはより身近な生活感覚や言葉遣いに影響を与えたという意味で、戦後日本のありようと深く結びついた存在であったとも考えられる。冒頭で示した第一の疑問、つまり総評は戦後において断絶した存在だったかについての、暫定的ではあるが筆者なりの答えがここにある。

5 総評が関与した労働者文化運動と現代に続くその系譜

そこでいま述べた文化機構としての総評や1950年代の労働運動がその後の時代とつながっているという問題と絡めて、本稿の冒頭で示した第二の疑問、すなわち1950年代の労働者文化運動がその後の日本の文化活動にどう受け継がれていったかを考えよう。この場合の労働者文化運動は狭義の意味である。ここでは一例としてプロレタリア文学運動を考えてみたい。

プロレタリア文学運動のなかに記録文学というジャンルがある。それはいつも物書かぬ人びとの声を再生する手法を編みだし、それまで物書かぬ人びとに自己表現する手段を与えた。記録文学の特徴は、書き手と読み手という文学の分業関係をなくし、時代を映す日常を題材にし、集団創作など作品の組織性を強調した。

記録文学の大規模な実験はまず、ニューディール下のアメリカで起こった。前述した当時の文化機構を構成したWPAは、民衆に文芸を提供する各種の公共機構を設け、そのさまざまなプロジェクトに失業した文化労働者を動員し、アメリカ文化の労働化を促進した。

文学、美術、音楽、演劇などの広範な分野で展開されたこれらのプロジェクトのなかに、人びとが日々の職場で語られる四方山話を全国各地で採取するインダストリアル・フォークロアと呼ばれ

(14) レイモンド・ウィリアムズ（若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭訳）『長い革命』ミネルヴァ書房、1983年、43-54頁。

るジャンルがあった。もともとこのジャンルは地方の左翼文学青年たちが発展させたものだが、WPAは彼らをプロジェクトで雇い、その成果は『アメリカン・フォークロア集』として出版された。また当時の大手出版社もその促進に関わった。これらのプロジェクトは、アメリカの参戦で立ち消えとなっていくが、この「労働者の語り部」たちが民衆の多様な経験とその表現方法を伝えることで上下関係なき美意識と言語空間の社会的解放を促したアメリカの記録文学の試みは、1960年代のカウンター・カルチャーの台頭のなかで再び脚光を浴びることになる。

これとは別の形だが、アメリカが国家プロジェクトとして記録文学の組織化に取り組んだ同じ1930年代半ばの中国で、『中国の一日』という全国から一般応募で集まった膨大な数の作品から選んだ短編記録文学集が発刊された。この本の意義は、中国の横断面を描いたそのパノラマ視的な作品内容とともに、全国の草の根文化力の動員にあった。初めて文学の担い手になった多くの地方民衆はまた顕在的にも潜在的にも、当時盛り上がった抗日運動の地方の担い手でもあった。この『中国の一日』を編集した知識人たちが当時国共合作による抗日統一戦線を提唱した中心人物たちであったことは偶然ではない。

このなかの児童の主体性を重視する生活教育運動は当時日本でも試みられており、日中間には活動家の交流もあったが、日中戦争の本格化でその関係も途絶え、また日本での活動自体も衰えるなか、その種火は戦中東北の生活綴り方運動のなかで守られた。この種火が再び点火したのが、『山びこ学校』などで大手出版社も関わった戦後の綴り方運動の発展であり、それは日教組に組織化された全国の小中学校教員によって生徒をも巻き込んだ全国的な作文運動に支えられた。

この戦後日本の記録文学運動の成果が1954年に、戦前から最初は労働者文化の運動体として、後に商業媒体となった平凡社が出した『綴り方風土記』（第一巻 北海道篇、第二巻 東北篇、第三巻 関東篇、第四巻 東海、長野、山梨篇、第五巻 関西篇、第六巻 瀬戸内、四国篇、第七巻 北陸、山陰篇、第八巻 九州、琉球篇）であり、おびただしい数の生徒が寄稿した各巻の実質的主任編集員が、戦前からの綴り方運動の活動家であり、戦後の作文教育の指導者であった国分一太郎である⁽¹⁵⁾。

その後平凡社はエスペランティストの助けを借りながら、同じ企画を世界大で試み、『世界の子どもたち』のシリーズを発刊する。さらに同社は『綴り方風土記』を下敷きに今度はその大人版ともいべき『風土記 日本』（第一巻 九州・沖縄篇、第二巻 中国・四国篇、第三巻 近畿篇、第四巻 関東・中部篇、第五巻 東北・北陸篇、第六巻 北海道篇、第七巻 総記・索引篇）を1957年に刊行する。

このシリーズの編集委員は大藤時彦・鎌田久子・宮本常一で、実質的には名著『忘れられた日本人』で知られる民俗学者の宮本と編集部でやはり後に民俗学者となる谷川健一のコンビが担った。そのはしがきには、このシリーズの意図が以下のように述べられている。

「わたしたちの祖国を見直そうという新しい動きがはじまっている。民衆の働きと知恵のすべて、共同の哀歎のすべてをわたしたちのものとし、これを明日の理想をになう人々の、今日の

(15) ここまで篠田徹「東方に相似あり——普遍としての日米中「三〇年代文学」」 蘆田孝昭教授退休記念論文編集委員会編『蘆田孝昭教授退休記念論文集 二三十年代中国と東西文芸』（東方書店、1998年）参照。

糧としたいという願いから本叢書はくわだてられた。

本叢書が、風土記の形式をとり、各地方の生活と文化を通じて、日本文化の本質をとらえようとするのは、従来の文化史の枠をやぶって、真の民衆の歴史を描こうとしたからにほかならない。これまでいわゆる日本文化史なるものは、中央の一部社会にかたよりすぎるか、さもなければ階級の緊張関係の上に組み立てられたものがほとんどであり、歴史の裏街道にかくれて生きた民衆社会の内部にいたっては、かえりみられることがあまりに少なかった。

しかも民衆こそはつねに地の塩であり、大地の深部を形成する民族の源泉の力であり、それぞれの地方の主人公であった。地方には地方の特色があった。それはゆらぐ炎のようにひろがり、かさなりあい、そそりたって、日本文化の母体となり、祖国の明日をおぼろげに照らし出す。本叢書は、これを消えることのない民族の火として鍛え上げるために、幾千年このかたの民衆の実感を、諸学問の成果のなかにたしかめようとする最初のころみである。読者は日本の民族文化をひろくまた深くながめるならば、それはやがて日本民衆の歴史と一致するものであることを本書によって知ることであろう。」

子供に代わって、民俗学者がこれまで無視されてきた地方に眠る民衆文化を掘り起こす。その眠りは明らかに労働運動を含む戦後の民主化運動によって揺り動かされ、労働者がみずから歴史をつくり文化の担い手になることをめざした1950年代の労働者文化運動に触発されていたと思われる。

この民俗学者の民衆へのまなざしは、その底辺へと向けられていく。それが『風土記 日本』の陣容をさらに厚くして編纂され、1959年の刊行以来好評を博した『日本残酷物語』（第一巻 貧しき人々の群れ、第二巻 忘れられた土地、第三巻 鎖国の悲劇、第四巻 保障なき社会、第五巻 近代の暗黒）である。

「これは流砂のごとく日本の最底辺にうずもれた人々の物語である。自然の奇蹟に見離され、体制の幸福にあずかることを知らぬ民衆の生活の記録であり、異常な速度と巨大な社会機構のかもしれない小さき者の歴史である」ではじまる「刊行のことば」は、「民衆自身の生活にとって、納得しがたいことがいかに多いか、しかもそれがいかに忘れ去られてゆくか——これが『日本残酷物語』をつらぬく主題旋律である。（中略）しかし体制の最底辺にあって体制の爪にもっとも強くとらえられた者たちこそ、その実もっとも反体制的であり、体制を批判する人間の自由をどん底でやむをえずつかんだこともたしかである。ゆえに『日本残酷物語』は非日常的な特殊な事件とはまったく無縁であり、つねに日常的な姿勢のもとに、ごくあたりまえの民衆層に受けとめられた生活の断面なのである。わたしたちは追いつめられた民衆がこの断面に施したさまざまの陰刻から、もっとも強烈な生の意味を汲みとろうとする。そうした願望を集大成した最初の試みとして『日本残酷物語』はその価値を世に問うのである」という戦闘的な運動言語に満ちている。

この総評労働運動と運動空間を共有した労働者文化運動、とりわけ記録文学運動を内包化した外延化に貢献した平凡社に続いたのが、筑摩書房であった。

1961年、同社から編集・執筆：鶴見俊輔・橋川文三・今井清一・松本三之介・神島二郎、資料顧問：井上清・大宅壮一・揖西光速・木村毅・菅井準一・隅谷三喜男・瀬沼茂樹・西田長寿・林

茂・宮尾しげをの陣容で発刊されたのが、『日本の百年』全十巻であり、各巻の奥付にある著者代表の鶴見俊輔は実質的にもその役を担った。

「断崖から落ちた人は、落ちてゆく瞬間にそれまでの自分の生涯をいちどきに思いうかべることがあるという。敗戦は、日本人にとって、断崖からつきおとされるような体験だった。このおなじ体験の中で、よみがえってくるむかしの思い出は、ちがう年代、ちがう経歴の人によってさまざまである。ちがう過去の記憶がよびさまされることで、敗戦をみる見方がちがってくるし、敗戦からたちなおる道すじを探す方法もちがってくる。

歴史がはじまって以来、二千年あまりのあいだ、一度も負けたことがないと信じていた日本が敗れた。このついにらくにさいして日本人がそれぞれのパノラマ視現象を経験したとするなら、それは、どういうものだったろう。」

ではじまる、1 新しい開国（1952年～60年）から、2 廃墟の中から（1945年～52年）、3 果てしなき戦線（1937年～45年）、4 アジア解放の夢（1931年～37年）、5 震災にゆらぐ（1923年～31年）、6 成金天下（1912年～23年）、7 明治の栄光（1900年～12年）、8 強国をめざして（1889年～1900年）、9 わき立つ民論（1877年～87年）、10 御一新の嵐（1861年～77年）の構成は、同種の日本近代史のシリーズとは大きく異なり、前述の書き出しの内容どおり、時代をさかのぼっていく。そしてこのシリーズのさらにユニークなところは、それぞれの時代の日常を多様な民衆経験を通して重層的に語っているところである。それはまたこれまでの日本近代史において無視された多様な民衆の声を掘り起こすだけでなく、それを通じて別の近代日本と明日の日本をみはらかそうとする。その意味で『日本の百年』は、プロの歴史家たちによる歴史書というより、さまざまな民衆経験を集めた記録文学に近い。

この筑摩の集合的記録文学編纂姿勢は、次の巨大な二つのシリーズの発刊でさらに強まっていく。それが中野好夫、吉川幸次郎、桑原武夫編『世界ノンフィクション全集』全五十巻（1960～64年）と、続編ともいべき監修者井上靖他、筑摩書房編集部編『現代世界ノンフィクション全集』全二十四巻（1966～68年）である。

一方平凡社に拠った民俗学者の地域の多様性とその文化の掘り起こしへの運動的執念は、1960年代以降農文協（農山漁村文化協会）に継承されていく。ちなみに農文協は戦後全国で展開する総評労働運動やその労働者文化運動と各地の農山漁村で接触しており、活動家や指導者も一部重複していた。そして1970年代以降、開発主義的な経済成長に傾斜する日本への批判を強めるなかで、長年続く『人間叢書』の編纂などで総評から離れていく革新系文化人の受け皿となりながら、1990年代前半に『全国の伝承 江戸時代——人づくり風土記——聞き書きによる知恵シリーズ』を発行する。その各巻の執筆者リストには、かつての『綴り方風土記』の子供の担任者名簿を髣髴とさせる各地の小中学校教員の名前が並ぶ。

また綴り方以後民俗学者がつかない民衆の生活文化へのこだわりは、法政大学出版局が1967年から、考察対象に関する関連学会や研究者集団の成果を代表的な研究者に著述させるスタイルで、最初の『船』から2016年12月の『はんこ』まですでに百七十八巻を数える『ものと人間の文化

史』にも受け継がれている。そのシリーズのキャプションには「人間が〈もの〉とのかかわりを通じて営々と築いてきた暮らしの足跡を具体的に辿りつつ・文明の基礎を問いなおす。手づくりの〈もの〉の記憶が失われ、〈もの〉離れが進行する危機の時代におくる豊穡な百科叢書」とある。それは綴り方運動や1950年代の労働者文化運動が戦前の民藝運動を含む日本版フォークロア運動の性格を有していたことを想起させる。ちなみにその運動を中心的に牽引した一人である宮本常一の実集は、未来社から1968年に第一巻が出て以来、2012年で五十一巻に及ぶ。

この総評労働運動と1950年代の労働者文化が育んだ集合的記録文学に反映された地域の民衆文化への主体的なこだわりは、半世紀近くの間にも歴史学においてもその継承を確認できる。その最近の成果が編集委員：網野善彦・大津透・鬼頭宏・桜井英治・山本幸司によるシリーズ『日本の歴史』（講談社、2000年）である。その第一回配本である第00巻『日本とは何か』（2000年）で以下のような目次立てをした著者の網野善彦は、同封された月報（2000年10月24日）の「特別対談「日本」から世界に光をあてる」で、興味深い話をしている。

第一章 「日本論」の現在	2 「日本国」とその国制
1 人類社会の壮年時代	3 「日本国」と列島の諸地域
2 日本人の自己認識	4 列島諸地域の差異
第二章 アジア大陸東辺の架け橋	5 「日本・日本人意識」の形成
——日本列島の実像	第四章 「瑞穂国日本」の虚像
1 アジア東辺の内海	1 「日本は農業社会」という常識
2 列島と西方地域の交流	2 「百姓＝農民」という思い込み
3 列島の北方・南方の交流	3 山野と樹木の文化
4 東方の太平洋へ	第五章 「日本論」の展望
5 列島社会の地域的差異	1 「進歩史観」の克服
第三章 列島社会と「日本国」	2 時代区分をめぐって
1 「倭国」から「日本国」へ	

すなわち「日本を一体の存在と考える発想」に基づいた枠組みが崩れつつあり、それぞれの地域を異なる社会として見る重要性を強調したあと、次のように述べている。

「今まで我々はヨーロッパ史を中心に立てられた時代区分、社会構成の規定、分析の方法によりかかってきましたが、日本列島自体についてもそれぞれの地域社会に即して考えてみると、ヨーロッパの枠ではおさまりのつかないものがでてきます。たとえば、中世の西国社会にみられる天皇、神仏の直属民、神仏の「奴婢」のような関係は、ヨーロッパとの比較ではつかめません。むしろアフリカや中南米の社会と比較した方がわかりやすいのではないかと思います。それだけではなく、日本の社会全体の中からいろいろな新しいモデルを見つけ出すことは決して不可能ではありません。北海道のアイヌや琉球の社会は当然ですが、九州や東北も、それ自体の独自の時代区分を持ち得る一面があります。そうした方向で考えていくと、これまで落と

していた問題がたくさん拾い出せるのではないかと思います。」

ここには記録文学運動が当初強調した「民族」が必ずしもナショナルなものでだけでなく、ローカルであると同時にインターナショナル、あるいはグローバルなものとして解釈できるものであったことを示している。この点は1950年代以降、1954年のバンドン会議をきっかけとし、その後アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの「第三世界」への関心が大きく広がった戦後日本のポピュラーカルチャーと総評や国民文化会議を含めた文化運動との関わりの再検討が求められる。

またこの間、生活綴り方運動、作文運動以来、これらの集合的記録文学の戦後的展開は、それまで存在が忘れられた人びとの声を拾うとともに、そのなかにある階級、人種、民族、ジェンダー、性の問題やそれをめぐる差別と抵抗の問題を、労働者文化にはじまり日本社会のなかにあるそれらの葛藤を含めて明らかにした。今日ダイバーシティといわれる問題が、例えば1950年代の労働者文化運動のなかにどのような形で内包され、それが戦後の記録文学の展開を通じてどのような形で外延化していったのかも、今後の重要な検討課題となろう⁽¹⁶⁾。

さらに平凡社や筑摩書房の活動は、これまで戦後の文化政治的文脈で検討されることはほとんどなかったように思う。けれども本稿で用いた文化機構の観点からその役割を考えたとき、戦後民主主義文化あるいはさらに戦後日本文化の労働化に少なからぬ関与をしたことは明らかだと思う。その点でこれら出版社も戦後民主主義の文化機構として検討する必要があるだろう。それは例えば高野総評が組織した国民運動に深く関与したりベラル知識人が、しばしばその雑誌『世界』など同社の出版活動と密接な関係があったことから「岩波文化人」と呼ばれたように、前述した文脈で平凡社や筑摩書房と密接な関係のあった知識人グループの役割を再検討することも重要であろう。

さらに集合的記録文学活動の一つの原点が作文教育であり、この点戦後国語教育とその担い手がやはり戦後民主主義文化機構の重要な担い手であったとすれば、同様な文脈で社会科教育や美術教育とその担い手やそれらの運動のメディアとなった出版や普及活動を含む学術、教育、文化組織も今後大いに検討されていい。

いずれにせよいま概観した出版文化の系譜は、1950年代の労働者文化運動が育んだ記録文学運動がその後も戦後日本の文化のなかに根付き、さらなる進化をとげていたことを示している。そしてこの流れの上流にさかのぼってその水流のほとばしるさまをあらためて見ると、それは遺産という言葉が似つかわしくないほどいまだみずみずしい。

(しのだ・とおる 早稲田大学社会科学総合学術院教授)

(16) こうした視点からアメリカの1940年代の労働者文化運動（この場合は広義）を検討した作品に、George Lipsitz, *Rainbow at Midnights: Labor and Culture*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1994がある。